

582-214



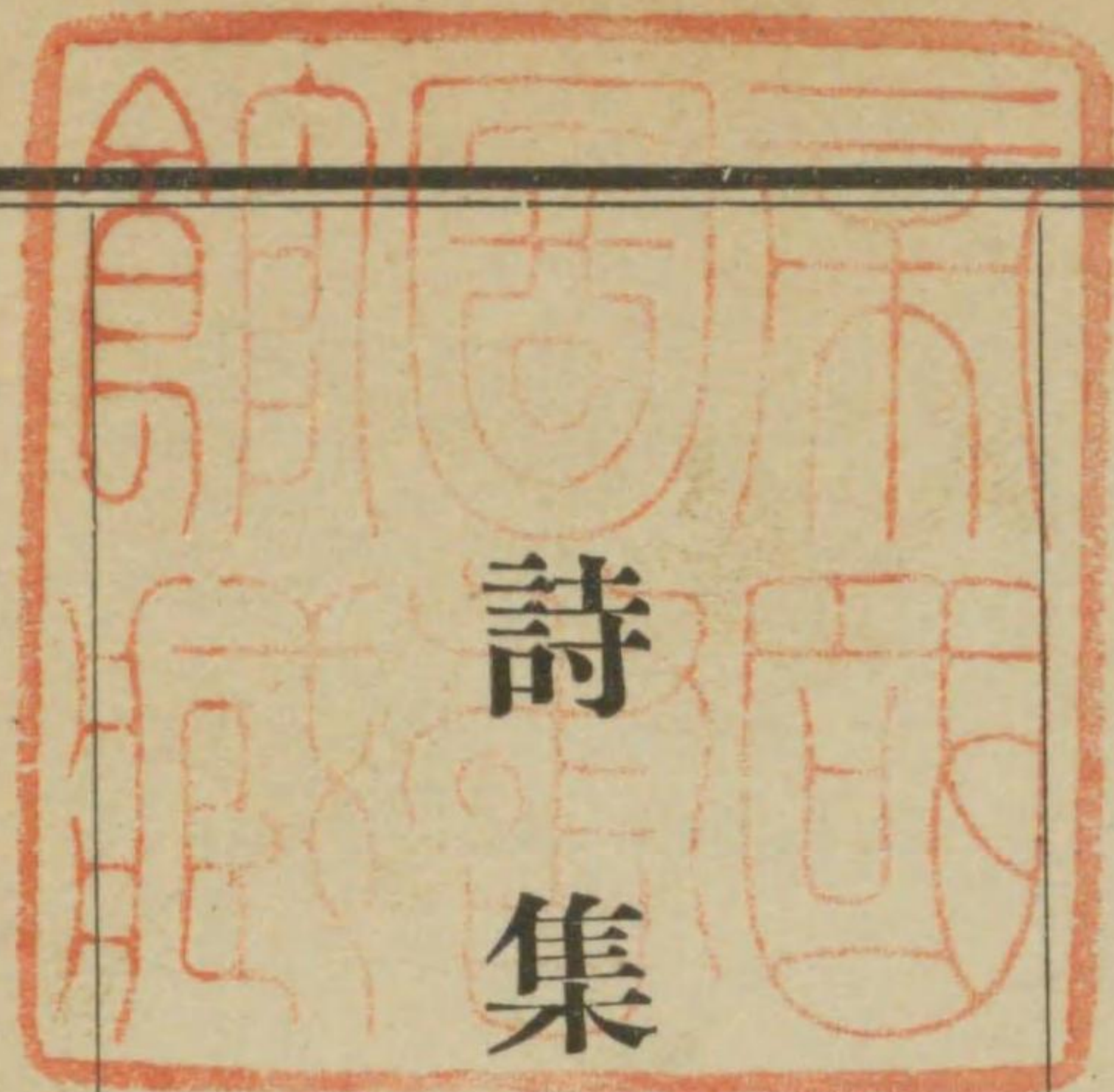
1200501522738

582

14



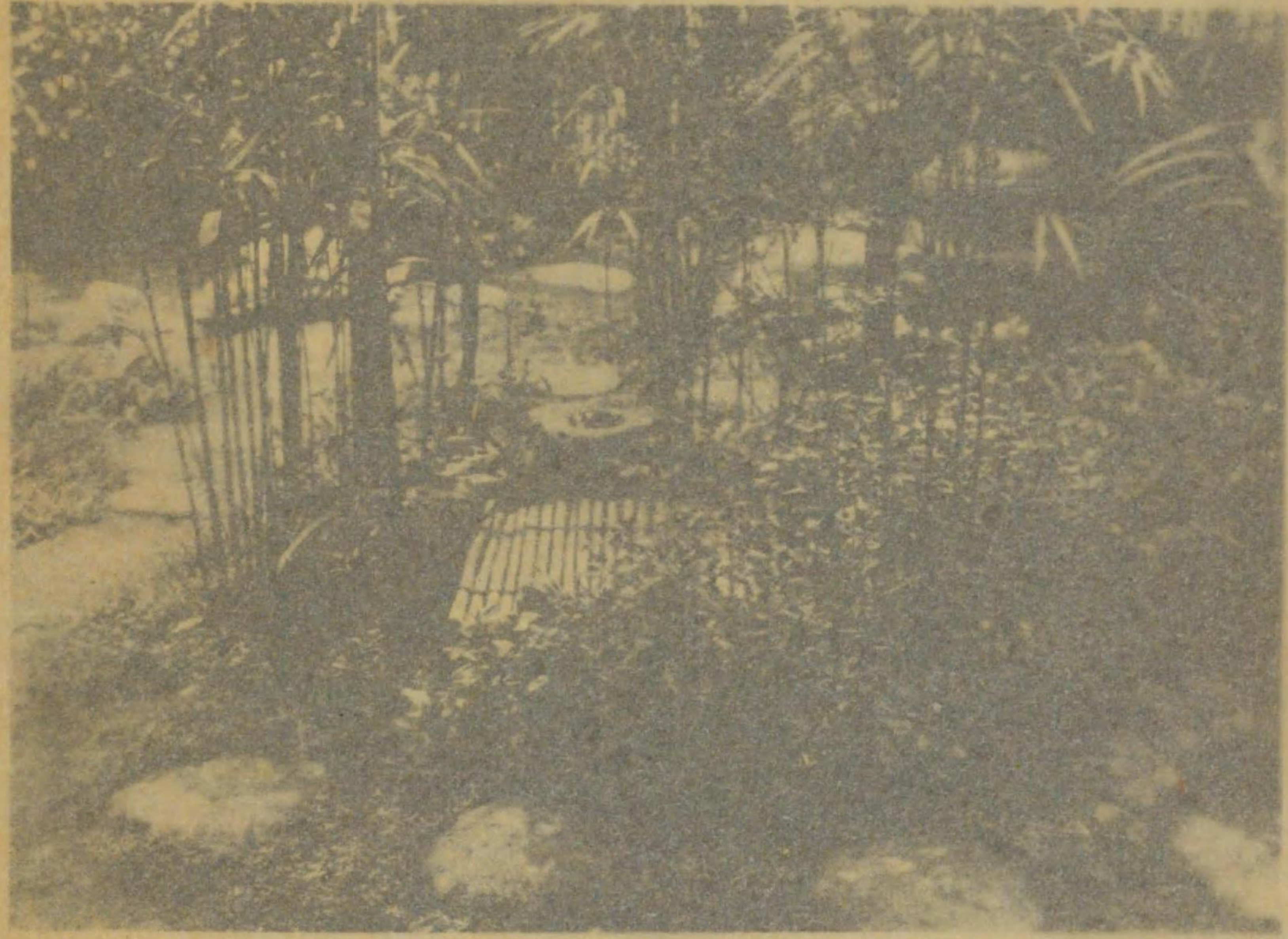
書
物は
大切に



詩集

鶴

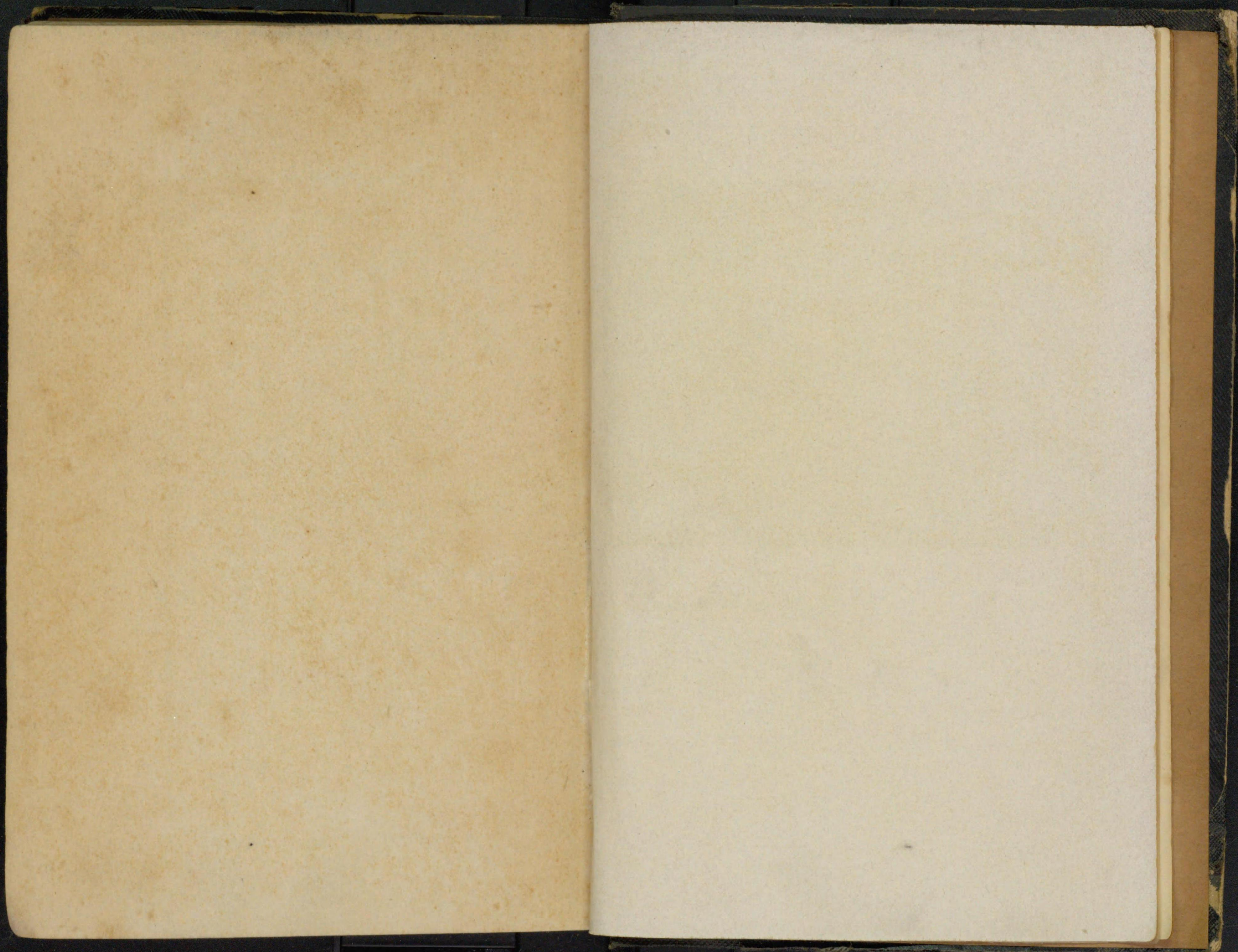




園庭の去過



園庭の去過



序

切なき思ぞ知る

我は張り詰めたる氷を愛す。

斯る切なき思ひを愛す。

我はその虹のごとく輝けるを見たり。

斯る花にあらざる花を愛す。

我は氷の奥にあるものに同感す、

その剣のごときものの中にある熱情を感じず、

我はつねに狭小なる人生に住めり、

その人生の荒涼の中に呻吟せり、

さればこそ張り詰めたる氷を愛す。

斯る切なき思ひを愛す。

序 文

室生君のこの頃の詩は深さを加へて行つてゐる。或る點けはしいと言つてもよいほど、人間世界の暗さに入つてゐる。これは少くともこの詩集の初め幾篇かに特徴が充分にうかがはれるであらう。或るものは險惡と言つてもよい。或るものは森嚴と言つてもよい。要するにそれ々の解釋は各人の見様である。だが此處に如何としても打消すべからざる事は、兎に角そのどれにせよ一流の行き方をしてゐるといふ點である。

わたしと室生君とは今を去る十五六年來の友人である。千家君はそれより舊く、佐藤惣之助君とは更に今少し舊かつた。たゞし當時は千家君も佐藤君も詩といふものを書いてはゐなかつた。室生君もあの當時は『洛陽の酒徒』で詩壇でのあばれ者であつた。今は然らず、實に若い人などにも親切な人である。彼れは老成の人である。年を加へて次第に或る陸離たる光を加へてゆく。わたしはこの彼れを今は懐しみさへもするのである。ああ老と青春……

嘗ては彼れに表面から悪口を言つて『新潮』誌上などで『蟹はその甲羅に似せて穴を堀る』などと面前で放言して、その小説で人氣の出だした頃苦い顔をさした事もあつた。だが記憶せられよ、この諺は個性に關する諺である。そし

て吾が室生君の最もよく、最も力ある點も實に彼れの覆へない『個性の人』であるといふ點である。

個性！ Ipersonality……

あゝ室生よ、汝のために、汝の詩のために幸あれよ。そして何時までも懐かしい風格を傳へよ。

昭和三、七、二、魚眠洞引拂ひの前夜

福 士 幸 次 郎

自

序

自序

自分は本詩集に「鐵^{くろがね}」といふ命題を付ける筈であつたが、「山河抄」其他の弱々しい韻律のある詩作が其題意を味帶しないので、遂に割愛して「鶴」と命題した。

本詩集の「山河抄」は震災後金澤滞留中の詩作になり、「故郷圖繪集」の中に集編の上、其同じい詩的精神の系統を全うすべきものであつたが、これ又當時の出版の都合上割愛し、幸、本詩集に編入することを得たのである。

巻頭の詩から頁を追うて制作の順位を示した。即ち巻頭の諸作品が最も新し

く「朝日をうたへる歌」は大正十五年の作品である。

自分は巻頭諸作に於て自分の中に膠着してゐる何物かを蹶破る氣持を持ち、それに打つかつて行つたのが最近の自分である。

昭和三年八月校了、輕井澤にて

著者

詩集 鶴

文章以前

切なき思ひぞ知る

老乙女

何者ぞ

埃の中

彼女

一

二

四

七

八

一〇

文章以前

彼と我

星の断章

情熱の射殺

人家の岸邊

垣なき道

友情的なる

我は

断層

彼女

三

一四

一六

一八

二〇

二二

二四

二六

二八

三

巨鱗

三

斯く汝らに語る

三

眞實なる思想

三

行ふべきもの

三

己の中に見ゆ

四〇

十人の母親

四

メイ・マツカアボーイ

四

凍えた頭

四七

大山脈の下

四九

山の中

五〇

山上の星

五二

石に就いて

五四

朝

五

鏡

五七

朝の路

五九

天氣

六〇

王城の朝

六二

客間

六四

鶴	一五
深夜	一三
塔の中	一六
瓦の鯨	一六
己は思ひ出す	二四
鶯鳥	二三
雲と雲との間	二三

山住み	六
白い旅館	六
ライオン	七
御使よりも先に	七
愚者の劔	七
砂塵の中	八
不安	八
椅子	八
朝日をよめる歌	八

鶴

一三六

彼女

一四〇

春の朝

一四三

天使

一四四

桃の花

一四五

女中

一四六

水入れ

一四七

古調四章

一四九

よもすがら

一五〇

福士幸次郎に

一五一

俳諧詩を寄せたる人に

一五二

旅人によせてうたへる

一五三

山河抄

一六一

山脈

一三二

雪に

一三三

からたちの花

一三四

机に寄す

一六六

夜が来た

一六九

明日

一七〇

寂鮎

一七二

朝餉

一七四

いつも釣をしてゐる子供

一七六

土手

一八〇

いなご

一八一

子供

一八二

少女の中の少女に

一八四

あさぜみ

一八六

野あそび

一八八

縁側

一九〇

松風

一九〇

椿

一九二

夜明

一九三

緑の荒野

一九四

詩集鶴

口繪寫真（過去の庭園）

表紙装幀

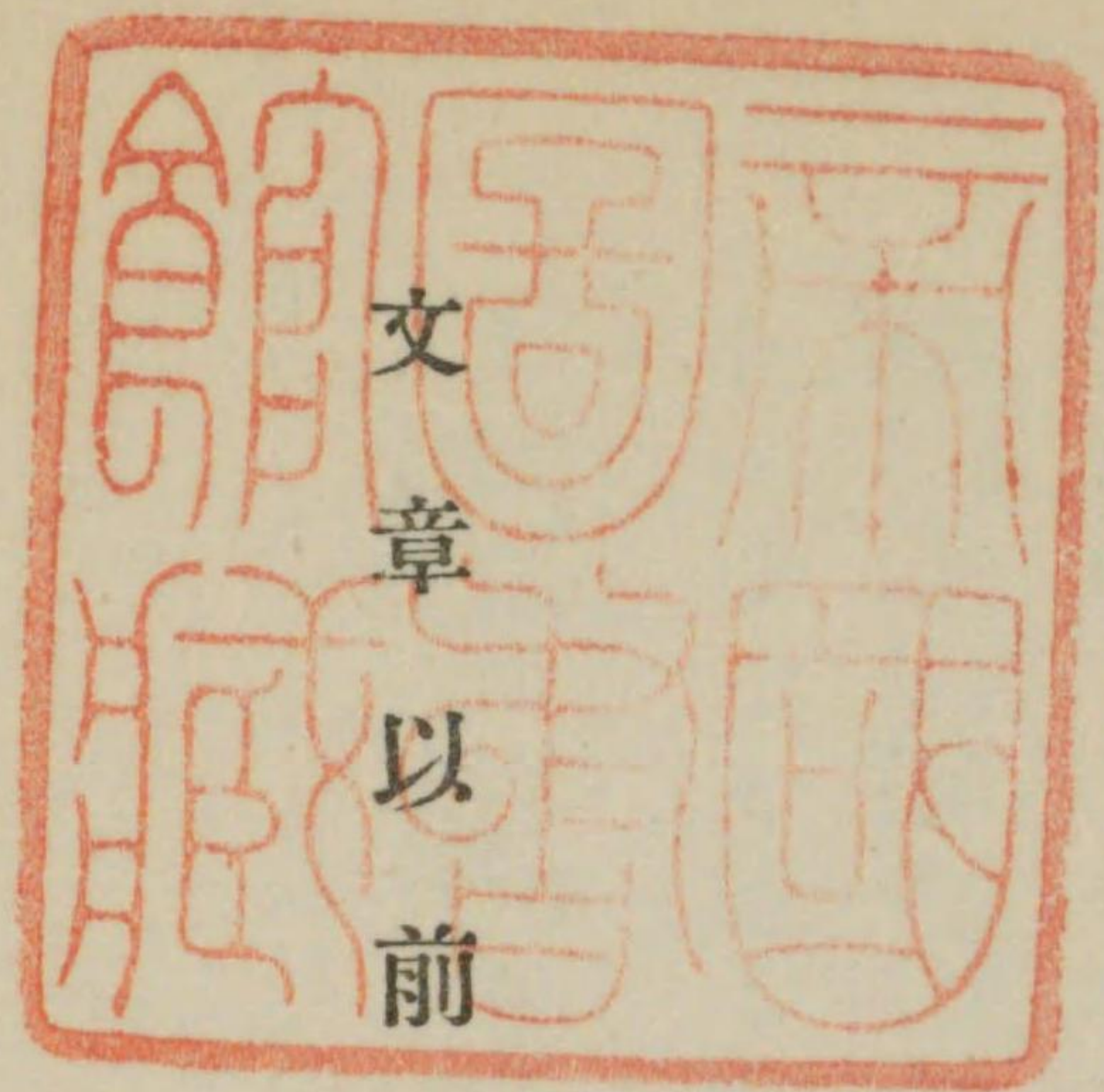
恩地孝四郎

木版彫刻

山本隆太郎

序文

福士幸次郎



切なき思ひぞ知る

我は張り詰めたる氷を愛す。

斯る切なき思ひを愛す。

我はその虹のごとく輝けるを見たり。

斯る花にあらざる花を愛す。

我は氷の奥にあるものに同感す、

その剣のごときものの中にある熱情を感じず、

我はつねに狭小なる人生に住めり、

その人生の荒涼の中に呻吟せり、

さればこそ張り詰めたる氷を愛す。

斯る切なき思ひを愛す。

老おいたる乙をと女め

我は詩を抛たんとす、

我はもはや詩人にあらざるかを思ひ惑ふ、

我は立ち出でて天地を四顧せり、

枯れたる木々を眺めぬ、

美しき彼女らの微笑を手摺みにせり、

我は埃と烟との奥にある街を眺めぬ、

斯て我はなほ詩人にあらざるかを惑ふ。

我に最早新鮮なる言葉なきかを思ふ、

我の唯切に念ふは

我がために最後の詩を與へよ

滅びゆく美を與へよ

いま一度我を呼ぶものに會はしめよ、

寒流を泳がむことを辭せず、

いま一度會はしめよ

老いたる乙女のごとき詩よ立ち還れ。

何者ぞ

何者か割れたり

我が中にありて閉じられしもの割れたり

かれらみな聲を擧げて叫び出せり

桃の實のごときもの割られたり

星のごときもの光り出せり。

埃の中

或日通りを眺めてゐたりしに

一列の樂隊の過ぎ行けり。

そのあとに群れたる子供ら尾き行き

我が子の姿も打交りたり、

かくて彼女は埃の中を行き

自ら時の過ぐるを知らず、

その虹の燃ゆるがごとき

逞しき埃の中に成人す。

彼
女

我は彼女を蹶飛ばせり、
曾て彼女の前にうづくまりし我は
眉を上げて彼女を蹶飛ばせり、
彼女は蹶飛ばされながら微笑ひ

追ひ詰められ

山の上のごときものの上に坐せり、
彼女はなほ自らを護りて坐して笑へり、
我はなほ彼女を蹶飛ばさんため、
その山に攀ち登らんとす、
我は足を上げて遂に山を蹶飛ばせり。

文章以前

自分は行き詰つてゐるやうだが、

何時の間にか茫々たる何處かの道へ出てゐる。

自分はもう書けないかと思ひ惑ひながら
やはり何物かを書いてゐる。

自分は書くことに何かを發見^みけて行く

文章など自分には既う要らないことに氣がつく。

×

自分は冬の道端で

鋭い枝が塀の上に出てゐるのを見る、

自分は立ち止つてそれに見とれてゐる。

自分の要るのは此の鋭い枝だけだ、

枝と自分との對陣してゐる時が消えてしまへば、

もう自分の文章も詩も滅びた後だ。

彼
と
我

我は何者かと我が有てるものを交換せり。

その者は長き髪を垂れ

暗夜とともに没し行けり。

常に星のごとく明滅す。

我は彼より手渡されしものを擁き

雨戸の外の暗夜をうかがふ

雨戸のそとに大なる者立てり。

我は彼とともに或物を交換す。

死のごとく苦しきものを交換す。

星の斷章

おれは半夜に星を見上げ
星の中からもおれの分れたるものを見、
おれに必要な美しさを削り取り
仙薬のごとく嚥み下し、

腹の中にも輝く星を感じてゐる。

×

或夜の氷は星を凍えしめ
氷の中にちりばみ
むしやくしやしたおれに踏まれてゐた。
おれは踏みながら勿體なかつた。

情熱の射殺

自分は結果に於て恐ろしいことになるので

仕方なく引金を曳いて

自分の中にある熱情を射殺した。

彼は何者かに擁かれたまま

鳶のやうに寂しく屋根の上から轉がり落ちた、

そして熱情と別れた自分は

冷たい巖窟のやうなところに

硝煙をあびたまま喪失者のやうに佇んでゐる――

人家の岸邊

己は思ふ

冬の山々から走つて出る寒い流れが
海を指して休む間もなく

我々の住む人家の岸べを洗つて過ぎるのを思ふ。

人家の岸べに沿うて瓦やブリキや紙屑が絶えず
流れてゆく。

海はかれらを遙か遠くに搬ぶであらう、

波は知らぬ異境に瓦やブリキを打ちあげて行く

だらう、

そこにも人は住んで岸べにむらがり

瓦やブリキを拾ひ上げ打眺めるであらう、

我々の現世と生活は解かれ記されるであらう、

その波はまた我々の人家に捲き返し烟れる波を上げ
遙かに戻り来るものの新鮮さで

我々を呼びさますであらう。

我々は答へるであらう。

そして彼等の言葉であるところのものを、

朝日の耀く岸邊に佇み讀むだらう。

垣なき道

我は一と摺みの春を抛てり、

春は造花のごとく諸々の枝に還りぬ。

かくて我は垣なき道、

標的なき道を歩み行けり。

友情的なる

此の日雪降り

此の日我心鬱せり

此の日我出で行かんとはせり

何者かに逢はん望を持てり

何者かに、——

何者かに留めがたき友情を感じず、

友情的なる漂渺を感じず、

此の日雪降り、

友情的なるものを痛感せり、

雪の中に我出で行かんとはせり。

我
は

我は清く生きんことを願へり、

我は美しき恵あらんことを乞へり、

我はまた富と名とを祈れり、

我は、――

我は今は毀れたる机に對へり、

我が背骨は地球のごとく曲れり、

我が肋骨は幾本かを不足す、

我が頭はブリキを埋積せり。

斷
層

己は地球の骨にしがみつき
太古の民のやうに星を怖れてゐる、
星を見詰めてゐると
星から割れて出るものがある。

東方の空には火が裂けて落ちてゐる、
地球の骨髓はつめたく冷え
己の身體は凍えるやうに寒く
夜の層は殊に暗く
星々の光は針のやうに刺して來る、

己は枯木すらない骨の上に
今は聲を嚙み

暗い寒い冷たい骨の上にしがみついて、
星と星の斷層を見詰めてゐる、

己の墜落してゆくところを見定めてゐる
一鳥啼かず

春すらもない漠々の中に

己は自分の墜落を知らうとしてゐる。

彼 女

彼女らは建築を持てり

彼女らはヤサシキ建築を持てり

此の世の終る時もそのヤサシサは亡びず、

彼女らは董のごとく匂へり、

巨
鱗

椎の老幹が城を築いてゐる

寒ぞらに鐵のやうな肌を露はにした大木の群は
静まり返つて戦ぎもしない、

皆空に對うて搔き上らうとし、

皆聲を上げようとしてゐる。

自分は酷たらしい夕日に掠められた幹の上に

老いの嚴しさを見上げた、

幹は黒い鱗を逆立てて立つてゐる。

斯く汝らに語る

愛すること少なかりし者も老いたり、
老いてなほ愛さんとするものも空しくなりぬ、
我の汝らに問ねんことは汝らの知れるところ、
我の再び思ひ惑へるところのものも

汝らの曾ての愛情の中に漂へり、
我の爲すべきことは何か、
我の愛さんとするものは何ものか、
我は老いたる汝を突き墜しその記録を滅せんとす、
愛すること少なかりしものの道を展かんとす。

眞實なる思想

われ汝らに告げん

われ汝らにつぶさに告げん

われ告げ終りし時汝らは叫ばん

汝らは立たん

その二十

眩ゆい書物の頁は夕方になりかかり
動かなくなつた。

その二十一

オレンヂの一つは朝日の當つたところで
たうとうその姿を失うた。

その二十二

朝日の當る膝の上で旅客は辨當を食べてゐる、
深い溪谷の片面にまだ朝日はとどいてゐない。

その二十三

蜂は朝の間に水のほとりで
その鋭いつるぎを砥ぎ澄ますのだ。

その二十四

朝日の昇るころ

重い書物を抱いて歩いて来る一人の男がある。

その二十五

あらゆる山嶽は幾萬年の後の今日になり
漸つと日の昇る方に向ひ
すこしづつ移動し始た。

その二十六

朝日に向ひ
葉といへども皆手を合してゐる
我々の祖先も皆そのやうに手を合した。

その二十七

花が自分で開かうとする心。

その二十八

花が花になる精分を幹の間に
流し合ふ時分。

その二十九

花を着けて枝や幹に重みがしつとりとしてくる頃
何處でも新しい朝日が匂ふのだ。

その三十

朝日の流れてゐる庭の面に
いつでも一人の翁が居て箒を持ち
清らかに掃ききよめてゐる。
そのかたはらに鶴が悠然と歩いてゐる。

その三十一

朝日の漲る空に

鶴が舞ひあがり舞ひあがり雲にとどいた。

その三十二

十一人の子供はみな學校へでかけた。

あとでそれらの母親は朝日の下で洗濯をし、

晝飯の用意をはじめた。

腹には十二人目の子供が眠つてゐた。

神よこのひとに健康を上げてください。

その三十三

神よこの世の母親には悉く健康を上げててください。

その三十四

朝日は大きな橋の上から昇つた。
橋が動いてゐるやうに舟の上から見えた。

その三十五

木の芽の一つは幹のうらからそつと日の當つた方へ
向いた。

木の芽が吹く、
箭のやうなものが絶えず飛んでゆく。

地上の樹々にも一杯の星がうつり

夏の夜は高く晴れ上つてゐる。

己は搔き登りたい氣になる、

己は美の正體に紛れ込みたくなる。

石に就て

その一

夕方には僕も庭師もへとへとになつた。

僅か五枚の飛石を打つのに

吾々は四日間戦ふた。

そして死の如く疲労した。

お前達は笑ふだらう。

お前達は天真爛漫で居られるからだ。

その二

石は本来乾いたままで

永遠に眠つて居れ。

眠れるが如く生きて居れ。

朝

おれは朝早く人氣のない卓^{てしや}で

やさしい野菜の料理をたべてゐた。

若葉の匂ひの中に

メリゴーラウンドはまだ眠つてゐる。

鏡

入口に鏡と若葉があり

鏡の中に女がゐてチラチラと笑つてゐる。

何といふ皓い齒であらう、

それがチラチラと笑つてゐる。

×

おれは彼女をしつかりと見た、

彼女は椅子につかまり動かなくなつた。

音楽はばかりと歇み

恐しい静かさが落ちて来た、

おれは氣がついて漸と女の動くのを見た、

彼女はやさしい女にちがひない。

朝の路

朝露の深い

美しい若木の下を歩いてゐると、

パンの配達夫が行き、

あとに芳ばしいパンの匂ひがした。

天 氣

いい天氣であつた、

彼女は洗濯をしてゐた、

井戸から美しい水があふれて出た、

彼女は一生懸命に洗濯をした、

どういふ不潔をも洗ひ落した。

布は白く清らかになつた。

王城の朝

朝起きて天気はいいかどうかと思ふ、
天氣の悪い日はおれも氣が沈む、
若葉に日があたり、
その王城の輝くのを見ると、

おれも晴々しく机に向ふ。
その日のすこやかさを喜ぶ。

客 間

子供は鶴のやうに白い服を着て、
部屋の間を歩いてゐる、

彼女はからだちうをレースの花に護られ、
美しく晴々しい天氣を迎へてゐる。

レースの花は彼女のおそふあたりに、
白く揺り散らされ咲きこぼれてゐる。

×

子供はピアノに鶴が止つてゐるやうに美しい。

山住み

山住みの深い井戸の底から
清い水が湧いて出てくる、
美しい露が寄り集つたやうな水だ、
それで茶を入れ

朝餉のあとで喫むのだ、
朝餉のあとで
子供の服を着かへさせる、
みづいろの夏の服だ、
それから散歩にでかける、
若木の徑を歩いてゆく。

白い旅館

白い旅館ホテルがある

林の奥にその窓が明るく見える

花で飾られてゐる

旅館ホテルの窓に下りてゐるものは飾装布イースだ。

赤や黄色の卓の上のものは

晩食のくだものだらう。

それとも夕方の花の類かも知れない

音楽が始まるらしい音調がしてゐる、

白いボーイが卓の間に動いてゐる、

電燈が點いてホテルが船のやうに見える。

ライオン

ライオンはまだ眠つてゐる

これを揺り起すことはできない

石を投げることも

吠えさせることもできない

力は解らない。

柔かい毛並を透して

優しい呼吸づかひが見えるだけだ。

御使より先に

或日曉方よりも早く

御使は下りてこられ

庭の石の上に立たれたのであらう、

何事か重要な話をしに來られたのであらう、

天使みづかみはあるひは灰ばんだ雀のやうに

早々さうさうに歸られたかも知れぬ。

御使が御使の必要がないごとく

早々さうさうに歸られたかも知れぬ、

何故か？

我が友は御使よりも先きに

杖を振つて速かに歩いて行つたからだ。

愚者の劔

神は自分に一人の女を與へた。

女は娘といふ形で

おれとともに生活をし出した。

おれは劔をさげ

この城の番人になり

神をもまだ輕蔑しないである。



砂塵の中

われは愛する庭を破壊せり、

自らその古色蒼然に倦怠を感じず、

されば此の日

ひそかなる微風の中に

石を起し樹木を倒伐せり

何ぞ我が情の悲しみあらんや、

石を起し苔を剝奪せるに

おのづから西方に風起り、

我が庭に濛々たる砂塵を上げて行けり。

不 安

詩とは何か、

詩と我々の関係とは何か、

我々の信じていい詩が何處にあるのか、

どういふ詩を信じていいのか、

詩は大なる藝術であるかどうか、

詩の中に我々が生涯潜むことができるか、

最早この一つの眞實に就て

不安はないか、

不安なく詩の中に「我」を抛つことができるか、

「我」に抵抗するものの前に

我々は自分の詩を持つて何人の前にも立ち得るか、

詩こそ生涯の仕事であると言へるか、

椅子

白い卓布が若葉の間にある、

對ひ合うた二つの椅子がある、

おれはその一つの椅子の上に腰をおろした、

空いた椅子は何時までも空いてゐる、

若葉はその籐の目に影を曳いてゐる。

雲と雲の間

その一

朝日は鎧戸のすき間から

寢床の上の美しい髪のをばまで近づき

お起きなさいと言つた。

彼女はおとなしくハイと答へた。

その二

植物は朝日のあかりを好いてゐて

一日中そのあかりで大部分の自分を育てるのだ。

その三

朝日の中の植物は鋭い枝の姿を整へて見て
自分の中の明るい鏡を覗き込んでゐる。

その四

朝日そのものの姿は
何か嬉しさうなもの羽ばたいてゐる氣もちに
似てゐる。

その五

朝日はソーダ水のやうに透明な玉を吐いて

絶えず木にそそいでゐる

樹木は身ふるひしながら

その光の中で一杯にひろがつてゐる

その六

植物はおもむろに朝日の光を吸ひこみ

それを莖の間に静かに流し込んだ。

その七

朝日の庭を掃いてゐると

折れた莖が静かに起き上らうとしてゐるのを見た。
弓なりに淑かに起き上らうとしてゐるのだ。

その八

朝日を一杯にあびてゐる家の庭に

木蓮が咲いてゐる清らかさ！

浅い流れの上に朝日がさし込んで

お互ひに何か喜び合ひ抱き合うてゐる。

波と水と朝日と三人。

その九

虻が早春の土の上で

羽根を整へようとしては落ちる、

朝日のひかりはそれを柔しく支へてやつてゐる。

その十

朝日がおとづれるときに

何處か遠いところで

眩ゆいばかりの重い書物の一頁が

そよかぜのやうに音もなく開かれて行く。

その十一

朝日が雲間にかくれる、

植物の表情に悲しげな曇りが落ちる。

その十二

子供が寢床でむづむづ始める、

そのとき朝日は雨戸の隙間にきらりと光り、

子供は何か速かに瞬きをするのだ。

その十三

昔、朝日のひとすぢの光が、
或時、時計に新しい時間の文字を書きつけた。

その十四

蜻蛉は朝日の昇つた方から立つて来る。
小學校の窓々は
朝日の昇る方に向うて建てられてゐる。

その十五

一枚書いて朝日を浴びに庭へ出る、
そして二枚目を静かに書く。

その十六

少女たちは土手の上で手と足とを舉げてダンスをし
てゐる、

朝日が土手一杯に當つてゐる。

その十七

木の幹のシンが朝日の昇るころに

ちらりと笑ふ、

そしてほんの少し動く。

その十八

田舎の老媪の或一人は

朝日の當る縁側でお茶を喫みながら

神々の思召しに従うた。

その十九

わたしの坐つてゐる膝の上から
次第に朝日の光がけふも退いてゆく
それを見送ることは寂しく切ない。

その二十

眩ゆい書物の頁は夕方になりかかり
動かなくなつた。

その二十一

オレンヂの一つは朝日の當つたところで
たうとうその姿を失うた。

その二十二

朝日の當る膝の上で旅客は辨當を食べてゐる、
深い溪谷の片面にまだ朝日はとどいてゐない。

その二十三

蜂は朝の間に水のほとりて

その鋭いつるぎを砥ぎ澄ますのだ。

その二十四

朝日の昇るころ

重い書物を抱いて歩いて来る一人の男がある。

その二十五

あらゆる山嶽は幾萬年の後の今日になり
漸つと日の昇る方に向ひ
すこしづつ移動し始た。

その二十六

朝日に向ひ

葉といへども皆手を合してゐる
我々の祖先も皆そのやうに手を合した。

その二十七

花が自分で開かうとする心。

その二十八

花が花になる精分を幹の間に
流し合ふ時分。

その二十九

花を着けて枝や幹に重みがしつとりとしてくる頃
何處でも新しい朝日が匂ふのだ。

その三十

朝日の流れてゐる庭の面に
いつでも一人の翁が居て箒を持ち
清らかに掃ききよめてゐる。
そのかたはらに鶴が悠然と歩いてゐる。

その三十一

朝日の漲る空に

鶴が舞ひあがり舞ひあがり雲にとどいた。

その三十二

十一人の子供はみな學校へてかけた。

あとでそれらの母親は朝日の下で洗濯をし、
晝飯の用意をはじめた。

腹には十二人目の子供が眠つてゐた。

神よこのひとに健康を上げてください。

その三十三

神よこの世の母親には悉く健康を上げてください。

成徳のそ
うのちあけゆ
ここに
成徳はあ
す

その三十四

朝日は大きな橋の上から昇つた。
橋が動いてゐるやうに舟の上から見えた。

その三十五

木の芽の一つは幹のうらからそつと日の當つた方へ
向いた。

木の芽が吹く、

箭のやうなものが絶えず飛んでゆく。

その四

朝日そのものの姿は

何か嬉しさうなものの羽ばたいてゐる氣もちに
似てゐる。

その五

朝日はソーダ水のやうに透明な玉を吐いて

絶えず木にそそいでゐる

樹木は身ぶるひしなから

その光の中で一杯にひろがつてゐる

その六

植物はおもむろに朝日の光を吸ひこみ

それを莖の間に静かに流し込んだ。

その七

朝日の庭を掃いてゐると

折れた莖が静かに起き上らうとしてゐるのを見た。
弓なりに淑かに起き上らうとしてゐるのだ。

その八

朝日を一杯にあびてゐる家の庭に

木蓮が咲いてゐる清らかさ！

浅い流れの上に朝日がさし込んで

お互ひに何か喜び合ひ抱き合つてゐる。

波と水と朝日と三人。

その九

虻が早春の土の上で

羽根を整へようとしては落ちる、

朝日のひかりはそれを柔しく支へてやつてゐる。

その十

朝日がおとづれるときに

何處か遠いところで

眩ゆいばかりの重い書物の一頁が

そよかぜのやうに音もなく開かれて行く。

その十一

朝日が雲間にかくれる、

植物の表情に悲しげな曇りが落ちる。

その十二

子供が寢床でむづむづ始める、

そのとき朝日は雨戸の隙間にきらりと光り、

子供は何か速かに瞬きをするのだ。

その十三

昔、朝日のひとすぢの光が、

或時、時計に新しい時間の文字を書きつけた。

その十四

蜻蛉は朝日の昇つた方から立つて来る。

小學校の窓々は

朝日の昇る方に向うて建てられてゐる。

その十五

一枚書いて朝日を浴びに庭へ出る、
そして二枚目を静かに書く。

その十六

少女たちは土手の上で手と足とを舉げてダンスをし
てゐる、

朝日が土手一杯に當つてゐる。

その十七

木の幹のシンが朝日の昇るころに
ちらりと笑ふ、
そしてほんの少し動く。

その十八

田舎の老媪の或一人は
朝日の當る縁側でお茶を喫みながら
神々の思召しに従うた。

その十九

わたしの坐つてゐる膝の上から
次第に朝日の光がけふも退いてゆく
それを見送ることは寂しく切ない。

遙かに遠い書齋のつかれを醫し、
美しく清い水をのむ、

この己の姿は山の上から見えるだらう、
或ひは草の間にかくれて見えないかも知れない、
ともあれ己は水のほとりに憩んでゐる、
この己を見つけるものは隣の女中くらゐであらう、
いまは己の家はもう寢静まつてゐるからだ。

鶴

鶴

○

或朝、本をつみかさねて見てみると
梅の花の匂ひがして來たのです。

○

これは永い間のことですが
夢の中でわたしは一人の貴婦人によく出遇ふのです。
貴婦人はいつでもわたくしを救ふやうな位置にゐて
たぐひなく優しい言葉を残して
毎夜のやうに別れてゆかれるのです。

○
植物があまりに生長してしまふと
わたくしには感興がなくなつてしまふのだ。

梅の老木の傍にしばらく佇んで見て
これは老木だからいいのだと思ふたのです。
さういふことは云へないでせうか。
田舎女のわたくしの母にも
さういふ好ましいところがあるのです。

彼
女

此處は本郷動坂の喫茶店、

ボロのやうな暖爐の前に己は坐つてゐる、

己は茶を喫んで温まつてから

八時半にはドアの外の往來へ歸つて行く、

己は彼女が支那女の焼栗賣が來たとき

そとはお寒いでせうと言ひ、

その暖爐の前に一席を與へたことを知つてゐる、

その冷たい手に自分の手を當てたことをも知つて

ゐる、

泪つばい性質らしいことも知つてゐる、

冷たい漆喰の上に立ちつづけてゐる彼女に、

却々春は遣つて來ないだらう。

春
の
朝

天
使

子供のある家庭に何時も天使てんのみつかりが来て
木を揺ぶつてゐる。

桃
の
枝

彼女は毎朝髪を編んでゐる

女
中

女中は毎晩働き疲れて寢床へ這入ると、
何處からかお迎えの馬車に乗つて出掛ける、
彼女はそれゆえ、
朝寝をして叱られるのだ。

水
入
れ

机のうへの水入れに
毎朝水がたたへられてゐるが
何時も美しい朝ごとの水である
わたしはその水を硯にこぼして手紙をかく、

水はいつでもあたらしく
水入れのそこにおとなしく静まつてゐる。
覗き込むと朝の明りがこもつてゐる。

古調四章

よもすがら

軒端をめぐる風を聴き

古火桶いだきて終夜よもすがらありにき

斯くて待たるるものは何ぞや

むなしき鐵瓶の沸き立ちゆき

炭はみな白くさらさらるるのみなれど

かくて永くは眠らず居りけり

きのふけふの己れを侘びるにあらず

明日我何を世に残すすべし知らざれば

よもすがら眠り得ざるなりけり。

福士幸次郎

——君が故郷にありしときに、

君、いま雪に埋れて

愛し兒のあたま撫でつつあらむか、

愛し兒、笛吹くことをやめ

美しき娘子のそで振り遊ばむ。

そのかたへに眉のかなしき君の坐りて

何をか讀みつつあらむや

何を思ひつつあらむや。

俳諧詩を寄せたる人に

—佐藤春夫にかへす歌

わが文書けど見るひとも
あらしとおもふこのごろは
せちに逝きたる彼をこそ

梢の果におもふなれ。

君をたづねず二とせや

言ことのたよりに樹を植ゑつ

しづかに暮らす君をこそ

市いちのあなたにおもふなれ、

わが文運のつたなくて

たつきの炎かいくぐり
梢の上に火を點ず。

あはれとは云はむより
旺んなりと思はずや

萬歳ならば山里に

俳諧ならば片田舎、

誠のひとのなげかひは

田端にきたり聞くべけれ。

旅びとに寄せてうたへる

あはれあはれ旅びとは

いつかはこころ安らはん

垣ほを見れば「山吹や

笠にさすべき枝のなり」

(芥川龍之介遺作)

旅びとはあはれあはれ

人聲もなき

山ざとに「白桃や

蒼うるめる枝の反り」

山
河
抄